



モーター
優秀で信頼性の高いEAD製が搭載されていて、立ち上がりの速いスムーズな回転でコントロールされている



プラッター
外側の直径は45cmもありシャフトの太いアルミダイキャスト製の重量級



MI-11833-C キャビネット

ほとんどの部分は木製で足の先には高さ調整のツメが付いている。正面の扉が前に開くようになっていて、中にイコライザーアンプなどの搭載が可能



MI-11895 アーム

RCA は16" ターンテーブル用のアームも数種類生産していて、こちらはアームの中程が上に折れ曲がる使いやすいタイプになる

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

第21回 **RCA**
16"ターンテーブルの世界

RCA社といえば1920年代頃からシアターサウンドを中心として音響開発に携わり、現在でも通用するスピーカーやアンプをこのコーナーでも紹介してきた。また、同社はアナログレコードの分野でもRCA Victorレーベルを1929年に立ち上げてから1985年頃まで生産している。今回はLPレコードが開発された1948年代頃からRCAが業務用に開発した超弩級の16"アナログターンテーブルを紹介しよう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

RCA BQ-2C

1950年代にラジオ局やスタジオ用などに開発されたモデル。この前にBQ-2Bというモデルがあったが、上部の本体部分はほぼ同じながら、キャビネットのデザインが一新され、有名なLC-1Aスタジオモニタースピーカーの流れを持つ美しいデザインになった。16インチ(40cm)のプラッターはシャフトが太いアルミダイキャスト製の重量級で、プラッターの内側に装備された33、45、78回転の3個のアイドラーで回転をコントロールしている。モーターには優秀で信頼性の高いEAD製を搭載。また、アームもRCAが生産しており、機種によってはフォノイコライザーも装備されている。



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

RCA

16"ターンテーブルの世界



プラッター内部
33、45、78回転用の3個のアイドラーが搭載され、回転をコントロールする



RCA BQ-2Cの当時のカタログ



RCA BQ-2Cのラベル

「アトリエJe-teeの岡田さんから「そろそろ入ります」とジラされること数カ月。ついに何台かまとめて入ってきたらしい。アメリカの放送局仕様、16インチ・プラッターのアナログ・プレーヤーである。

しばらく前までは、まさに知る人ぞ知る存在だった。写真で見ることがあっても、まさか個人で使うなんてことは誰も本気で考えなかった。しかしここ数年前からじわじわと注目されてきて、熱心なマニアが手に入れていると聞く。プレーヤーが大きいほど回転は安定するから、そこに目が行くのは当然だろう。といっても半世紀以上の業務用プレーヤーであるから、おいそれと入手できるものではない。

海を渡ってきた何台かのうち1台が整備を終え、さっそく聴かせてもらうことになった。RCA社のTYPE BQ-2Cというモデルだ。

見た瞬間、どんなにへそ曲がりでも「でかい」と率直に思うだろう。直径40cm越えであるから30cm径のLPを載せると、プラッターに大きな幅の余白ができる。LP盤が小さいようにも見える。

プラッターを外して裏返すと、親指よりはるかにぶつとシャフトの太さに感動する。自分のプレーヤーのことを思うと、これはもうやんなった。

プラッターを岡田さんが指で叩くと重くて低い音が響く。この音が再生音の重要な要素であることは容易に想像でき

ついに登場した16インチ！
高音も低音も余裕たっぷり

た。近くにいったガラードを叩くとチーンと高い。小さいから当たり前ではあるけれど。

キャビネットはハンマートーン仕上げの塗装をしてある木製だった。写真で見るとの通りの大きな箱であるから、少なからず音に影響を与える。

BQ-2Cはアイドラー・タイプのプレーヤーだ。アイドラーは78回転、45回転、33 1/3回転のために合計3個が装備されている。アイドラー1個でそれぞれの回転ごとにプリームの径を変える方式とは異なる。なにかにつけて、往年のアメリカだな、太っ腹だな、豪儀だなと思う。

アームはRCAのMI-11895という17インチという超ロングタイプで、シユアーM44Gが付いていた。まず「ナット・キング・コール&ジョージ・シアリング」を聴いてみた。高い音も低い音も余裕たっぷり風のようにさらさらと出てくる。大きな物量によって得たものは、気負いのない自然な音調だった。いつも撮影を担当している小林幹彦さんがSP盤を何枚か持ってきた。パティ・ベイジやキング・クロスビーの音がやわらかく、そして抜群の安定感がある。「これは違いますね」と小林さんもちよつと驚いている様子だ。最後は美空ひばりの「港町13番地」。もうすぐ二十歳の歌声だった。まさかRCAの16インチでひばりを聴くとはね。でもこれが一番よかった！